

教師の生活価値観が生活設計教育の学習指導内容に及ぼす影響に関する実証的研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2014-02-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小清水, 貴子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7507

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月5日現在

機関番号：13801

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21730702

研究課題名（和文）教師の生活価値観が生活設計教育の学習指導内容に及ぼす影響に関する実証的研究

研究課題名（英文）Effect of Life Design Teaching on a Home Economics Teacher's Lifestyle Consciousness

研究代表者

小清水 貴子（KOSHIMIZU TAKAKO）

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：70452852

研究成果の概要（和文）：教師の生活価値観と学習指導内容の結びつきを明らかにすることを目的として、家庭科教師を対象としたアンケート調査・インタビュー調査・授業観察に基づいて、教師自身の生活や生き方に対する意識が家庭科の学習指導に影響を及ぼしていること、教師は自身の生活価値観を意識的にとらえて授業を省察し、学習指導を工夫する必要があることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the effect of life design teaching on a home economics teacher's lifestyle consciousness. Through questionnaire, interview, and classroom observation intended for home economics teachers, it is clarified that lesson goals and teaching methods varied a great deal depending on the teacher's lifestyle consciousness. Therefore, it is necessary for teachers to consciously distinguish between the contents of students' learning and their own beliefs. It is desirable for teachers to reflect on their teaching methods so as to teach the subject content neutrally and to give students the chance to think for themselves.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：家庭科教育学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：家庭科教育，家庭科教師，学習指導，生活価値観

1. 研究開始当初の背景

家庭科の教科目標は「家庭生活の充実向上を図る能力と実践的態度を育てる」ことにある。私たちの生活は個々人の生活価値観に基づいており、一様ではない。したがって、教師は目の前にいる生徒の生活実態に応じて学習目標を定め、生徒の生活実態と結びついた実践的指導を行わなければならない。つまり、教師の役割は生徒に適した教材を選択し、生活における科学的知識や技術・技能を習得

しながら、生徒が自己の生活価値観を形成できるように指導することにあるといえる。

しかし実際は、教師も一人の生活者であり、生活そのものを扱う授業において、教師自身の生活価値観と切り離して授業を行うことは難しい。生徒の実態に即した学習目標を設定する際に、教師の主観的評価が入り込むこともある。また、授業で自身の生活体験を語る教師も少なくなく、無意識のうちに生徒に教師の価値観を押しつける可能性もある。し

かしながら、これまでの先行研究において、教師個人の生活価値観が学習指導内容にどのような影響を与えているのか、教師の生活価値観に対するアンケートやインタビュー調査、また具体的な授業内容からその実態を構造的にとらえ、相対化した分析研究は極めて少ない。家庭科教師は1校1名の配置であることが多く、客観的に自己の授業をとらえづらい環境にある。そうした家庭科教師が置かれている現状をふまえた上で家庭科教育の充実・向上を図るには、家庭科教師の学習指導の特徴を明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、教師自身の生活に対する価値観が、生活設計を中心とする家庭科の指導内容や指導方法にどのような影響を及ぼしているのか、その特徴を実証的に明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

つぎの(1)～(3)を柱として、研究を進める。

(1)教師の生活経験と学習指導観の関連

- ・調査時期 2010年7月
- ・調査対象 F県内の高等学校家庭科教師27名
- ・調査方法 質問紙調査
- ・調査項目 家庭科の授業を通してとくに生徒に学んでほしいこと(自由記述で回答)、家族・保育・高齢者・生活設計の学習目標とその目標を設定した理由(自由記述で回答)、各分野の学習指導の必要性(4件法で回答)、教師のキャリア志向に関する項目(4件法で回答)
- ・分析方法 数量的データは統計的処理を行い、自由記述形式の質的データは考察の補足データとして用いた。

(2)家庭科教師のライフヒストリーと学習指導の関連

- ・調査時期 2010年9月～2011年2月
- ・調査対象 N県およびS県内の中・高等学校家庭科教師8名
- ・調査方法 半構造化面接法によるインタビュー調査(一人1時間程度)と授業観察
- ・調査項目 (インタビュー調査)経歴、生活や人生に対する意識、家庭科の目標設定とその理由、授業における指導上の工夫(授業観察)学習指導の視点、学習指導方法
- ・分析方法 (インタビュー調査)ICレコーダーに記録したデータをスクリ

プトに起こして、プロトコル分析を行った。

(授業観察)観察メモの記録はインタビュー調査の補足データとして用いた。

(3)授業者の学習題材に対する意識と学習指導の関連

- ・調査時期 2012年7月～12月
- ・調査対象 S県の国立大学教育学部教員養成課程家庭科教育専修に在籍する女子学生17名
- ・調査方法 質問紙調査、学習指導案作成と模擬授業、インタビュー調査
- ・調査項目 (質問紙調査)生き方に関する項目(6件法で回答)
(学習指導案作成と模擬授業)家族領域に関する50分の学習指導案の学習目標、学習内容、使用教材、模擬授業における学習指導(ビデオに記録)
(インタビュー調査)自己の家族観、学習目標の設定、学習内容や指導法、教材選択の理由
- ・分析方法 学習目標、学習内容についてデータを整理し、質問紙調査とインタビュー調査のデータを基に個々の特徴を分析・考察する。

4. 研究成果

(1)教師の生活経験と学習指導観の関連

教師の年代、婚姻経験の有無、子育て経験の有無、介護経験の有無、キャリア志向性と学習指導観との関連を探った。

①教師の年代と学習指導観との関連

年代にかかわらず学習指導の必要性が高かった分野は、食生活分野と保育分野であった。食育や保育体験学習は家庭科教育の現代的な課題であり、新学習指導要領にもその重要性が取り上げられている。現代的な課題に対しては教師自身の生活経験にかかわらず、学習指導の必要性を感じているといえる。一方、衣生活分野は年代に関係なく、全項目のなかで最も学習指導の必要性が低かった。

教師の年代によって学習指導の必要性で有意差がみられた分野は、家族の学習と高齢者の学習であった。家族の学習では、30代以下では家族の機能や家事労働、40代では自分で創っていく家族や家族の大切さ、50代では個と家族や現代家族の諸問題などであった。

高齢者の学習に関する記述では、30代以下では高齢者の特徴や高齢者を支えるしくみに主眼が置かれ、50代では、高齢者としての生き方や生き甲斐の作り方など、高齢期に近い教師自身の生活経験が学習内容に反映されている様子が見えがえた。つまり、年代別

にテーマを扱う切り口が異なるといえる。

②婚姻経験と学習指導観の関連

「消費者の権利と責任」「クレジットのしくみと多重債務」の項目で、婚姻経験有り群と無し群の回答に10%水準で有意傾向がみられた。婚姻経験無し群の方が、自身が自由に使えるお金が多いことから消費行動への関心が高いことが推察される。また、生活設計の学習について、婚姻経験無し群の方が、働くことの大切さや経済計画に対する関心が高かった。

③子育て経験と学習指導観の関連

子育て経験有り群よりも無し群の方が、家庭科で扱う全般の分野にわたって、学習指導の必要性をより感じていることが明らかになった。また、子育て経験無し群が必要性を感じている分野は消費生活分野であった。

「家庭科の授業を通してとくに生徒に学んでほしいこと」の記述では、子育て経験有り群は、よりよく生きることやより豊かな生活をしていこうとする態度を育成することが多く記述されていた。一方、子育て経験無し群は、自立することを目標に置いていた。つまり、子育て経験有り群は、家族関係やワーク・ライフ・バランスにみられる生活時間の学習に重点をおき、子育て経験無し群は経済生活や働くことに重点をおいていた。教師の生活経験の背景の違いが、両群の視点の差異につながっていることが示唆された。

④介護経験と学習指導観の関連

介護経験有り群と無し群では、介護経験に関連する学習項目である福祉分野の項目では統計的有意差がみられなかった。しかし、衣食住のモノに関する学習項目についてみると、統計的有意差はみられなかったものの食生活分野では、介護経験無し群の方が介護経験有り群よりも、学習指導の必要性の平均値が高かった。婚姻経験や介護経験といった人間関係にかかわる生活経験が少ない教師は、家族や保育、福祉などのヒトに関わる学習指導よりも、衣食住などのモノに関わる学習指導に重きを置く傾向があることが推察される。

⑤キャリア志向と学習指導観との関連

研修意欲が低い群は高い群よりも、ほとんどの分野に対して、学習指導の必要性を感じていなかった。とくに、専門的な知識を有する「ジェンダー」「高齢者の介護」「高齢者を支えるしくみ」「室内環境の整備と住まいの維持管理」「家計の管理や資産運用」では、研修意欲が高い群の平均値が高く、統計的有意差があった。教員研修は、教師の生活経験だけでなく、一生活者としての知識を得、価

値観を構築する上で有効な手立てである。したがって、自己のキャリアアップを図る意欲が高い教師ほど、学習指導に対してその必要性を感じているといえる。

以上の結果から、生活を学習対象とする家庭科の授業において、教師自身が持つ生活者としての姿勢や生活経験が関与していることが明らかになった。家庭科教師は1校1名配置であることが多く、実習室や教材・教具の管理を一人で担っている。研修を受講する機会も多いとはいえない。教材研究が教師自身の生活経験に基づいて行われる可能性は否めない。家庭科教師が置かれている現状をふまえ、教材研究の支援や研修機会の充実などの対応が必要であることが示唆された。

(2)家庭科教師のライフヒストリーと学習指導の関連

家庭科教師としてのキャリアや生活経験と、家庭科の学習指導の方略や学習目標の設定の特徴を探った。

①家庭科教師としてのキャリアと学習指導の関連

教師経験の差異による特徴を探るため、調査対象者8名のうち、教師E、教師F、教師Hの3名について比較検討を行った。

表1 各教師の特徴

	教師E	教師F	教師H
性別	女性	女性	女性
年齢	20代前半	30代前半	60代前半
雇用形態	常勤講師	専任教諭	退職後、非常勤講師
教員歴	1年	8年	37年
専門	家庭経営	食物栄養	被服
家庭科観	生徒が楽しんで学べる教科	心豊かに生きるための基礎を学ぶ教科	生き方を考える教科
生徒に身につけさせたいこと	生活に必要な最低限の知識や技術の習得	ものづくりを通して知識や技術の習得、家族やモノに対する思いを持つ	自分の頭で考え、選択し、行動する力
授業づくりの工夫	生徒が楽しめる学習活動	実習を増やす。生徒が興味を持つ教材の工夫	知的好奇心をかき立てること、考えるための手段としての教材の工夫

各教師の特徴を表1に示す。教師Hは教師経験が長く、大きな概念で教科として家庭科をとらえていた。教師H自身、高度経済成長を経験し、ライフスタイルが変化していく様子を体験している。自身の専門である被服領域が必修から選択の扱いに変化し、変化する社会の中で自身の生き方や生活を考え、臨機応変に対応することの大切さを実感した。その思いが、「自分の頭で考えることができる人」になってほしいという、家庭科で育てたい生徒像を構築し、それを実現するための指導方略につながっていた。これに対し、教師E、教師Fは、家庭科の学習内容に関する知識や技術を習得させること、家庭科を学ぶ楽しさを感じさせることをねらいとしている。教師Fは8年の教員歴を有するが、そのうち6年は被服と保育のみの授業を担当していた。より専門的な知識や技術を習得させることを学習目標としており、そのための指導方略についてキャリアを積んできたといえる。また、教師経験が浅い教師Eの場合は、授業の活動自体の楽しさに視点を置いていることが明らかになった。

②教師の結婚経験と学習指導の関連

教師Fは自身のライフコースと学習指導の関連について、結婚経験を転機としてあげた。結婚と仕事のどちらを選ぶか、両者の両立について不安を抱えつつも、ライフステージ全体を考えて「いつ結婚するか」の判断を下すことの重要性を感じていた。そうした自身の経験を基に、ワーク・ライフ・バランスや長期的視野で生活設計を行うことに重点をおいた授業を構築するようになったと語った。つまり、結婚経験によって、家族領域や生活設計を教える意義を問い直し、自身の経験をふまえた学習指導を行うようになったことが明らかになった。

③教師の子育て・転任経験と学習指導の関連

教師Gは、子育てや転任経験という、自身の2つの生活経験をもとに、野菜の授業を構築して実践している。子どもがアトピー性皮膚炎を持ち、野菜嫌いであったこと、教師G自身、転任先の学校で忙しさから食生活が乱れた時期を経験したことから、とくに野菜の摂取に強い関心を抱くようになったと語った。教師Gが教えていた生徒たちの食生活でも野菜の摂取量の少なさが課題であったことから、調べ学習やプロの料理人を招いた調理実習、家庭での実践報告会などの指導方略を立て、野菜を中心とした食生活分野の学習指導に力点を置いていた。

以上の結果から、教師自身がさまざまなライフイベントを経験することは、教材研究を深めること、自信をもって学習内容を指導することなどと関連があることが明らかにな

った。教師のライフコースと学習指導の関連をみると、同じ教師であっても、ライフイベントを経験する前と後では指導内容や指導方略が変化していることが明らかになった。家庭科教師は、相談をし合える同教科の教師が身近にいない場合が多く、資料集や指導書からは得られない生きた資料として、自身の生活経験が授業を構築する上での貴重な情報となることが考えられる。しかしながら、一方で、教師によって学習指導に温度差があることが課題として示された。家庭科教師が自身のキャリアを形成し、指導力のスキルアップを図るには研修の機会を得ること、また、教師自身の経験から学習目標の設定や教材研究を行うのではなく、生徒の実態から学習目標を設定し、生徒にとって有効な学習指導になっているかどうかを、つねに自己省察を行うことが求められる。

(3)授業者の学習題材に対する意識と学習指導の関連

ここでは、授業を行う授業者の学習題材に対する意識と実際の授業における学習指導の関連を探った。とくに、授業者の価値観が反映されやすい家族分野の授業を取り上げることにした。実際の教師を調査対象にしたかったが、家族分野の授業実施時期やインタビュー調査の時間調整を行うことが困難であったため、教員養成課程の家庭科教育専修の大学生を対象に調査を行った。

①授業者の家族観

将来の結婚、出産、就労に関する意識を調査した結果、結婚に対してはほとんどが意欲的で、自分の家庭を持ちたいという願望を示した。出産についても8割が願望を持っていた。就労に関しては、35.2%の学生が専業主婦を希望した。これらの学生は、就業意欲を持つ学生に比べて、「結婚することは家庭のために自分の趣味や生き方を犠牲にすることである」と回答した割合が高かった。そのため、結婚後の生活における仕事と家事・育児の両立不安を感じ、主婦業に専念することを望んでいると推察される。

②授業者の題材観と学習指導の関連

授業者が題材設定を行う場合、内発的動機づけと外発的動機づけの2つの動機づけに分類できた。授業者自身の生活経験を基に題材を設定した（内発的動機づけ）授業者は、授業者自身の家庭生活に課題を見だし、その課題解決に向けた学習指導を行った。さらに、生徒に学ばせたい内容や授業者自身が感じていること（家族観）が、模擬授業の発言に表れる傾向があることがわかった。これに対して、学習指導要領や一般的な社会問題を基に題材を設定した（外発的動機づけ）授業

者は、自らの生活に課題を見いだしていなかった。したがって、模擬授業では学習指導内容を淡々と教えるという特徴がみられた。

③授業者の生活経験および問題関心と学習指導の関連

授業者の家庭生活に対する問題関心と学習指導の関連について検討した。その結果、家庭生活に問題関心が低い場合、授業への願いが生じず、授業に家族観は反映されなかった。このケースに当てはまる学生Cの場合、授業後の検討においても、授業内容ではなく、授業の進め方に関する発言が目立ち、学生Cが授業で教えたい内容を明確に持っていないことが明らかになった。授業者自身の問題関心がなければ、授業の願いが形成されず、学習指導が希薄になることが示唆された。逆に、家庭生活に問題関心が高い場合は、授業者の家族観が授業に反映されていた。男女共同社会参画社会を題材として取り上げた学生Mは、男性優位の地域で育ち、男女の差について疑問を感じていた。その疑問が家庭生活における問題関心になり、授業の題材設定に表れた。また、学生Jは、大学で家族関係論の授業で学んだことが強い問題関心を引き出し、家族の形態に関する授業を行った。これらは、授業者の生活経験がきっかけとなり、そこから問題関心が生まれ、学習指導内容を充実させる要因として働いていた。

また、授業者の生活経験による問題関心と学習指導意識との関連を検討した。その結果、生活経験による問題関心が学習指導意識を促進させる要因として作用する場合と、阻害させる要因として作用する場合があることがわかった。例えば、学生Bはすべて母親が家事を担う家庭で育った経験から、家事分担が必要であるという問題意識を持ち、男女の家事の役割分担を指導することに肯定的な考えを示して家事分担に関する授業を行った。一方、学生Hは家庭で強制的に家事を担当させられた経験から、家事分担を授業で積極的に扱うことについて否定的な考えを示した。多忙な父を持ち、家事は母親が担う家庭で育った学生Oは、現実的に父親が家事をすることは困難であることから、家庭によって事情はさまざまであり、家事分担を授業で取り上げる必要性を感じていなかった。また、家事を分担する家庭に育った学生Jは、家事分担は当たり前であるという考えを持っており、家事分担を授業で取り上げる必要性を感じていなかった。

以上の結果から、授業者の生活経験や問題関心は学習指導に影響を及ぼすが、学習指導を促進する要因として作用する場合と、逆に、阻害する要因として作用する場合があることが明らかになった。

授業は授業者の価値観のみで構築するも

のではない。授業者は自らの生活経験や問題関心を客観的にとらえ、学習指導の目的や内容と混同させないようにする必要がある。ここでは、調査対象が学生であり、生徒の実態をイメージすることが困難であったことから、授業者自身の考えがより強く授業に反映されたと考えられる。しかし、先に行った現職教師を対象にした2つの調査の結果からも、家庭科の授業に、教師自身の生活に対する価値観が反映されることは否めない。したがって、そのことを家庭科教師自身が自覚した上で、教材研究や学習指導を行うことの必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

①小清水貴子, 教師の生活経験と家庭科の学習指導観との関連, 静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇), 査読有, 43, 2012, pp. 191-202

②小清水貴子, 教員採用試験にみる家庭科教師に求められる力, 静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇), 査読有, 42, 2011, pp. 213-219

[学会発表] (計3件)

① Takako KOSHIMIZU, The Relationship between Home Economics Teachers' Lifestyle Consciousness and Teaching, The International Federation for Home Economics XXII World Congress, 2012年7月18日, Melbourne convention center, Australia

②小清水貴子, 家庭科教員志望の学生の生活的自立行動に関する意識と実態, 日本家庭科教育学会第55回大会, 2012年7月1日, 東京学芸大学

③小清水貴子, 授業者の浴衣の着用技能の習得が和服の着装を扱う授業のデザインに与える影響, 日本家庭科教育学会第54回大会, 2011年6月25日, 長崎大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小清水 貴子 (KOSHIMIZU TAKAKO)
静岡大学・教育学部・准教授
研究者番号: 70452852

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし